

2017 年度決算説明・経営現況報告要旨（2018 年 5 月 11 日発表）

千代田化工建設の山東でございます。

いつも大変お世話になり、ありがとうございます。

早速ですが、2018 年 3 月期決算および 2019 年 3 月期の業績見通し、並びに経営現況につきご説明申し上げます。

まず、2018 年 3 月期決算ですが、2 ページをご覧ください。ここにポイントを挙げておりますが、

一つ目は、次のスライド 3 ページ、にございますように、当期純利益が 64 億円となり、前年の 411 億円の赤字から黒字転換を果たすことができました。

この結果、1 株当たり配当も配当性向 30% の 7.5 円で、前年比 1.5 円増加しております。

2 ページ目に戻りまして、決算ハイライトの二つ目は、地球環境エンジニアリング分野の受注が順調に伸びていることです。年間の全社の受注高は 3,012 億円となりましたが、地球環境エンジニアリング分野の受注は 1,227 億円と、受注全体の 41%を占めるまでになりました。また、前年比でも 26%の伸びとなっています。

三つ目は、構造改革の推進により、販管費の削減が進んでいることです。販管費の削減は、国内外のグループ会社を中心に、前年比で約 16 億円、率にして約 7%の削減となりました。

四つ目は、昨年 11 月 10 日発表の第 2 四半期決算でもご説明致しましたとおり、先期は、米国案件で期初計画比約 300 億円の追加コストを計上

したことなどにより、営業利益は 123 億円、経常利益は 101 億円の赤字となっております。

次に、スライド 4 ページの受注高をご覧ください。

受注全体は 3,012 億円と、通期予想・3,500 億円を下回りましたが、スライドの左側、地域別に見ますと、国内の受注は予想を超える 1,517 億円となっています。

また、スライドの右側、分野別に見ますと、医薬・生化学・一般化学と環境・新エネ・インフラ・その他を合わせた「地球環境エンジニアリング分野」の受注が 1,227 億円で、全体の約 41%を占め、順調に受注を積み上げており、昨年 8 月に策定した当社の中期経営計画で注力する方針が出されているこの分野で、確実に成果が表れ始めています。

次に、スライドの 5 ページの受注残高をご覧ください。

2018 年 3 月期末の受注残高は、手持ち工事の進捗等により 6,535 億円となっておりますが、2019 年 3 月期には LNG の市況の回復等に伴って大型受注が見込めることから、今後、受注残高は増加に転じると考えております。

続いてスライド 6 ページに損益計算書項目を示しております。

まず、完成工事高は 5,109 億円でほぼ通期予想通りでした。ページが飛びますが、次の 7 ページに詳細がございますように、スライド左側、地域別に見ると、海外は遂行中大型案件の進捗等により、前年比約 1,000 億円減少していますが、国内は、安定的に受注が積み上がっていることなどから、完工高も前年比増加しております。

6 ページに戻りまして、販管費は、先程ご説明致しました通り、構造改革の推進により、国内外のグループ会社を中心に、前年比で約 16 億円、率にして約 7%減の削減となりました。

営業利益、経常利益につきましては、先程ご説明申し上げましたが、第 2 四半期決算でもご説明致しました通り、今期は、米国案件で期初計画比約 300 億円の追加コストを計上したことなどにより、営業利益は 123 億円、経常利益は 101 億円の赤字となっております。

当期純利益につきましては、第 2 四半期決算でご説明申し上げましたように、EMAS Chiyoda Subsea 社に関する損失引当引当金の取崩し、関係会社株式の一部売却等により特別利益 150 億円を計上したこと、また、先程ご説明いたしました米国案件のコスト増に伴い、契約主体である米国子会社の連邦法人税等が還付されることなどにより、当期純利益は 64 億円となり、通期予想 50 億円を上回りました。

スライド 7 ページは先程説明しましたので、スライド 8 ページに参ります。こちらはバランスシート項目を記載しております。

まず、現預金は、前年度末比 393 億円減少して 1,040 億円となっております。連結キャッシュフロー計算書に記載がありますように、営業キャッシュフローが、大型案件などが終盤を迎え、工事の進捗に伴い売上債権が増加する一方、業者への支払等が進み仕入債務が減少。加えて、顧客からの前受金も減少したことなどにより、341 億円減少したことが、現預金が減少した主な理由です。

関係会社事業損失引当金は前年度末比 229 億円減少していますが、EMAS Chiyoda Subsea 社に関する損失引当引当金の取崩しによるもの

です。

最後に、2019年3月期の業績予想についてご説明します。スライド9ページをご覧ください。

まず受注高ですが、LNG市況の回復等に伴い大型案件の動きが見えてきたことなどから、8,000億円を見込みます。

海外と国内の内訳は、それぞれ6,000億円と2,000億円を予想しております。もう少し詳しい中身につきましては、後ほど、経営現況報告の中で説明させていただきます。

完成工事高は、遂行中の大型LNG案件の進捗がピークを越えていることなどにより4,000億円、完成工事総利益は300億円を予想しています。

販管費は、一層の構造改革を進めることにより185億円に抑える計画で、その結果、営業利益115億円、経常利益125億円、当期純利益65億円を予想しています。

配当は通期で7.5円を予想しております。

以上で2018年3月期決算概要および2019年3月期業績予想の説明を終わります。

それでは続きまして、経営現況報告を行います。

まず、2ページをご覧ください。当社を取り巻く事業環境についてです。

エネルギー、地球環境、デジタルの3つの分野に分けて記載しています。  
ポイントは以下の通りです。

- エネルギー分野は、アジアを中心とした天然ガス需要の増加、及び、米国シェール由来の石油、石化案件の活発化、
- 地球環境分野は、脱炭素社会の到来を意識した再生可能エネルギーへの投資拡大と蓄電、蓄エネルギー技術の進歩、
- デジタルに関しては、AI・Big data・IoT 活用が多くの選択肢を持った形で急速に進化している、

こういった事業環境の変化を捉えた当社の今期の事業展開について次にご説明します。

3 ページをご覧ください。

エネルギー分野に関する今期の事業展開に関してです。大きく分けて2つあります。ひとつは大型 EPC 案件の受注積み増し、もうひとつはエネルギーバリューチェーン事業構築の推進です。

1)の大型 EPC 案件のうち、スライド右上の石油・化学・金属分野につきましては、後ほど触れますが、つい最近、海外の大型石化案件を受注する目途がつかえました。スライド左上の LNG・ガスにつきましては、最近の LNG 需要の増大に呼応して、いくつもの案件が動き出しています。当社では今期は、特に米国、アフリカで大型 LNG 案件の受注を期待しています。また、我々が納入実績を持つパプアニューギニア、カタール、ロシアなどでも大型案件が動き出しており、これらの大型案件を来期以降に確実に受注に結び付けるべく、FEED を含め様々な作業を継続してまいります。

次に2)のバリューチェーン事業の構築推進につきましては、このスライド下側の記載に沿って取り組みを進めています。特に、ダウンストリームでは、東南アジアでアセット保有型事業としての Gas to Power 案件への取り組みを開始しました。今期の数字には未だ直ちにはつながりませんが、将来の安定的収益源となることを目指して鋭意取り組んで参ります。

4 ページをご覧ください。

地球環境分野です。地球環境分野は大きく3つに分かれます。左から、新エネルギー、環境・省エネ、新素材、ライフサイエンスの3つです。

このうち、新エネルギーとライフサイエンスの2つが今後の成長のドライバーと考えています。新エネルギーでは従来のメガソーラーに加え、今期は大型の蓄電設備やバイオマス発電での受注を目指しています。特に蓄電に関しては単なる EPC にとどまらず、エネルギーマネジメント事業としての受注を目指しています。また、洋上風力への参入も現在準備を進めています。

ライフサイエンスでは、従来の低分子医薬品製造設備にとどまらず、中分子、高分子、再生医療、再生医薬、バイオへの取り組みを強化します。また、先日、中分子医薬品の一種であるペプチド医薬品開発事業に出資しました。こういった EPC 以外の取り組みも少しずつではありますが進めていきたいと考えています。

5 ページをご覧ください。

デジタル分野です。この分野への取り組みは大きく2つに分かれます。ひとつは左側の全社デジタル化、もうひとつは、右側、お客様に対する新しいビジネスモデルの開発です。いずれもこのデジタル分野ではパート

ナーとの連携、アライアンスの組み方が鍵となります。ここに記載の内容に沿ってパートナーリングの拡大を図ってまいります。

今期の連結受注高予想についてご説明します。6 ページをご覧ください。  
受注高予想 8,000 億円、内訳は、エネルギー分野 6,500 億円、このうち LNG・ガスが 4,000 億円、石油・化学・金属が 2,500 億円、そして地球環境分野が 1,500 億円となります。

まず、LNG・ガスの 4,000 億円については、先程述べました通り、今期は米国、モザンビークの大型 LNG 案件のうち、最低でもどちらか 1 件を受注することをベースとしています。2 件受注の場合は大幅な上振れとなる見込みです。

石油・化学・金属に関しては先程述べました通り、既に海外の大型石化案件の受注の目途がついています。これに国内案件が加わります。さらにインドネシア銅精錬が加わると、2,500 億円を大幅に上回る数字になりますが、インドネシア銅精錬については、今期はバックアップ案件という位置付けとしています。

地球環境分野に関しては新エネルギー分野を中心に受注が順調に伸びており、特にある程度規模の纏まった案件の受注が複数、既に見えていますので、地球環境分野での受注 1,500 億円はかなり固いと判断しています。

以上の状況を踏まえ、今期の受注高予想 8,000 億円は十分に達成可能と判断しています。

尚、ご参考までですが、この 6 ページの下側に当社の収益ポートフォリオ

の推移をお示しました。昨年 8 月に発表した中期経営計画では、地球環境分野の受注割合を前中計期間平均の 15%から 2020 年度には 30%に引き上げることを目標に掲げました。今期はこの比率が 19%であり、昨年発表の中計に沿って地球環境分野が確実に伸びていることがお分かり頂けると思います。

最後に 7 ページ以降に事業トピックスをお付けしています。

以上で私からの説明を終わります。

以上

この資料には、本資料発表時における将来に関する見通しおよび計画に基づく予測が含まれています。経済情勢の変動等に伴うリスクや不確定要因により、予測が実際の業績と異なる可能性があり、予想の達成、および将来の業績を保証するものではありません。  
従いまして、この業績見通しのみを依拠して投資判断を下すことはお控えくださいますようお願いいたします。